

八傳丸呆阿

村上元三

読売新聞社

阿あ呆ほう丸まる傳でん八ぱち

上
下

あほうまるでんぼち
阿呆丸傳八

昭和41年6月10日 第1刷

定価 350 円

著 者	むら 村 かみ 上 げん 元 ぞう 三
発行者	鈴木 敏 夫
印刷所	凸版印刷株式会社
製本所	堅省堂製本株式会社
発行所	読 売 新 聞 社

東京都中央区銀座西3の1
大阪市北区野崎町77
北九州市小倉区中津口73の25

©, GENZŌ MURAKAMI 1966

阿呆丸傳八

目次

鳶 の 町 53	堀 江 川 44	鯉 34	浦 島 太 郎 25	海 の 男 16	庖 丁 旅 7
----------------------------	----------------------------	------------------	---------------------------------	----------------------------	---------------------------

長崎くんち	62
しっぽく料理	71
雲仙の煙	80
七彩の夕陽	89
飛衣	98
守礼之邦	107
運天	116
大きな取引	125
海の正月	134
鬱陵島	143
外国嫌い	152

最後の膳	南町奉行所	お救い小屋	嫌われ者	深川の家	赤い月	竹島一件	品川の風	かげろう	覚悟	暗い空
.....										
251	242	233	224	215	206	197	188	179	170	161

装丁

岩田専太郎

庖丁旅

一

どのあたりから正氣を失ってしまったのか、傳八には、憶えがない。

板場から庖丁などを持出しては料理人の耻だ、という氣持が、どこかにあった。だから、石見屋音右衛門の胸倉をつかんで、二三べん横っ面を殴りつけているうちに、お幸が何か言いながら、横合いから傳八をとめようとした。

「てめえのような売女に、今日までうつつを抜かしていたかと思うと、われながらみっともねえや」

そう罵った自分の言葉だけは、ちゃんと傳八の耳に残っている。それからお幸を蹴倒したり、石見屋を殴りつけたりしているうちに、石見屋の連れの札差仲間をはじめ、八百吉の女中などが傳八を抱きとめたし、誰かに頭を殴りつけられた。それでも傳八は、ずいぶん暴れたようだが、あとはどういう風になったのか、少しも憶えがない。

ただ、眼の前に八百吉の女あるじのお吉や、女中のお幸の顔が、何べんも近づいてきたり、すうっと遠ざかって行ったりしたことは、ぼんやりと記憶にあつた。

身体中が痛むので、眼を覚ますと、いきなりまぶしい陽の光が、眼の中へ飛び込んできた。起きあがろうとしたが、頭の中に錐を突き込まれるようで、思わず唸り声が出た。足も腰も、自由に動かない。

一枚一枚、眼の前にぶらさがっている膜が剥がれるように、だんだん焦点がはっきりしてきた。

眼の前に、男たちがいる。二人、三人、と勘定して

から、あわてて傳八は起きあがろうとした。だが、兩腕はうしろに廻され、柱のようなものに縛りつけられている。

「眼が覚めたかえ」

三人目に見えてきた男が、煙草をのみながら、傳八に声をかけた。八丁堀の定廻り同心、加田三七であった。

びっくりして、あたりを見廻すと、ここは自身番の中に違いない。腰高障子に朝の陽が一ぱいに射して、近くから鳴物や呼込みの声が聞える。浅草觀世音の矢大臣門前にある自身番、と見当がついた。

何か言おうとして傳八は、声が出ず、ばくばくと口を開けた。

「幸助、野郎に水をやれ」

と加田三七が、苦笑いをしながら、

「こいつが、これほど酔っ払うとは、よくせきのことに違いねえ」

自身番の士間にしゃがんでいた男が、のそつと立つ

て、手桶から柄杓で水をくんできてくれた。いつも八百吉に出入りをしている岡っ引で、加田三七の手先を勤める本所石原の幸助であった。

「旦那、あつしは何をしたんでございましょう。とんと憶えがございませんが」

水をのませてもらい、ようやく正氣に返った傳八は、妙な顔をして三七に訊いた。

「ここに鏡があつたら、お前の面を映して見せてやりてえ。せつかくの色男が、台無しだぜ」

と、三七は笑った。

まだ年は若いが、年功者でないと勤まらない定廻り同心をやっているのは、三七が弱い者いじめをせず、市中の者たちに評判がいいからであろう。顔は陽に灼けているが、すらりとした優男だし、色町などではずいぶん騒がれていると言う。

「繩を解いてやれ」

三七に言われて、幸助の乾分の留吉という男が立ってきて、柱の環に縛りつけてあった繩をほどいてくれ

た。

肩や腕がずきずき痛むが、傳八は、そつと自分の顔や頭をさわつてみた。元結もゆるんで、髪が乱れているし、頬も腫れあがり、血が滲んでゐるらしい。唇も切れて、腫れあがつていた。

「喧嘩の起りは、八百吉で聞いた」

と加田三七は、上り框のところから、傳八の顔を見おろし、きびしい声になった。

「お前も料理の腕を悪く言われちゃあ、腹が立つのも無理がねえ。しかも、末は夫婦、と約束したお幸にちよつかいを出されたんだから、酒をのんで暴れたくなつたのだから、対手がよくねえ。札差というのは、お旗本に金子をご用立している商人、と知らねえわけはねえだろう。石見屋音右衛門は、すっかり腹を立てて、ゆうべのうちに手を廻してしまつた。せつかく八百吉の脇板を勤めて、もうじき板前になれるというのに、お前この先、江戸で料理人をやれなくなるかも知れねえぜ。酔つたあげくとは言いがた、石見屋の前

で、青沢甲介様へ悪態をついたのだそうだからな。世間の評判はどうあろうと、青沢様のお役目は、大公儀のお目付、れっきとした五百石取のお旗本だぜ」

「へい」

しばらくうなだれていた傳八は、土間に坐り直し、三七を見あげた。

ことし二十五、傳八はこの道に入ってから、十五年になる。はじめは料理場の使い走りから、洗ひ方、煮方、焼方、と勤めて、これで五年も八百吉の板場で脇板をやっている。浅草觀世音前、広小路に向つた東仲町の料理茶屋で、江戸の料理屋番付でも三役に入る八百吉で働いているのだから、料理人としての傳八の行末は、太鼓判を押されたも同様であつた。

色は浅黒いが、目鼻立も尋常だし、がっちり緊つた身体つきで、傳八は力も強い。

「加田さんの旦那」

はつきりと正気に返つた傳八は、思い切つた表情で言つた。

「おっしゃられてみると、石見屋を殴りつけたことは、間違いないですね。青沢様の悪口を言ったというのも、その通りだと存じます。お旗本という身分には逆えねえが、お役目を笠にきて、料理屋をいじめたり、せっかく作った料理を庭へほうり出して、普段から虫の好かねえお客でしたからね。伝馬町の牢へ入れる、とおっしゃるのなら、どうか、ご自由に願います。どうせあつしは、生みの親の顔も知らねえ捨子。

八百吉さんのご先代に拾われた人間なんですから、お仕置になったところで、誰も嘆いてくれる者はおおりませんからね」

「そうかえ」

と加田三七は、にやりと笑うと、

「お幸は、どうなんだ」

「あんな阿魔。金を持っている客だからと思つて、石見屋なんかにお世辞を使いやあがつて」

「ところが、お幸はゆうべ、おいらの足許にすがつて、泣きながらこう言つたぜ。傳八さんにもしものこ

とがあつたら、あたしも生きてはおりません、とな。けき暗いうちからお幸は、淡島様で、お百度詣りをしているだよ。お前の身が無事のように、とな」

「それは、自分が蒔いた種ですから、お幸も」

あとを言にかけて傳八は、言葉が続かなくなり、落着かない顔色になった。

八百吉の女中の中でも、お幸は器量よしで、客の評判もいい。ことし二十歳、出戻りで、世帯の苦勞を知っているせいであらうか、朋輩にも親切であつた。去年、天保五年の二月、神田佐久間町から出た火が鉄砲洲まで延びるという大火のあと、八百吉の女あるじのお吉が炊出しをやって、焼出されの人々へ握飯を配ったときなど、お幸は卒先して働き、あるじのお吉と一緒に町名主から賞められたほどであつた。

傳八と同じような身の上で、意地の悪い継母に育てられ、十五の年から茶屋奉公をしていたお幸が、甲斐性なしの男に引っかけた夫婦になつたのは、やはり家の中の温かさに焦がれていたからだという。

「のう、傳八、よく考えろ」

加田三七は、通り一ぺんの人情ではなく、親身のあふれた声で言った。

「しばらくお幸と別れることになるだろうが、あの女はいつまでもお前を待っているに違いねえ。石見屋とお幸とのあいだには、何もなかったんだ。それだけは確かだぜ」

「ご親切に、有難う存じますが、あつしは、どこかへ島流しになりますんで」

「馬鹿野郎」

いきなり三七は、大きな声を出した。

「お前という奴は、眼の玉が頭の裏側についていやあがるのか。湯へ入ってから、髪結床へ行け。ちゃんとしたところで、改めて申渡すことがある」

二

八百吉の女あるじお吉は、亭主の由三郎に死別れて

から、五十を越える今日まで、女手ひとつで大きな店を切り廻してきた。

ちょっと見ると、痩せて顔色は悪いし、弱そうに見えるが、気の強い、しっかり者の女であった。

「二つ、あたしから言いたいことがある」

とお吉は、長火鉢の向うから、いつものおっとりとした語調で言った。

茶の間の敷居を越したところに、湯へ入り、髪床へ行ってきた傳八が、着物も着換えて、きちんと両膝を揃えて坐っている。その横に、お幸が、まるで自分が叱られているような恰好で、うなだれていた。

お吉の横のほうに、この八百吉の板前の茂五郎が、こわい顔で控えている。もう六十に近い年で、江戸の板前の中では、知られた存在であった。でっぷり肥つた、相撲取のような身体つきで、本来なら料理人の元締めもやれる男だが、自分ではこの八百吉の板場で一生を終る、と言い切っている。

「加田さんの旦那が、いろいろ取りなして下すった

が、石見屋さんは、ご公儀のお役人たちのあいだでは、顔の利くお人だからね」

とお吉は、青く刺った眉のあたりを、少ししかめながら言った。仲町小町と言われた若いころの面影が、まだお吉の顔に残っている。

「その石見屋さんを、お前はひどい目に会わせたのだ。そりゃあ、料理が気に入らない、などと言われれば、腹を立てるのも無理ではないが、板前さんが笑っているのに、番のあがったお前が外へ出て酒をのみ、また店へ引返してきて、石見屋さんの座敷へ暴れ込んだのだからね。お幸だって、飛んだとばっちりだ。料理屋で働く女中が、お客に愛想よくするのは、当り前じゃあないか」

そこまで言うてからお吉は、自分でもおかしくなったのか、ふっと笑い声を洩らして、

「肝腎の話が、あとになったね。お前が青沢様の悪口を言ったこと、石見屋さんは市ヶ谷のお屋敷へ出かけで行って、大げさに告げ口をしたらいいのさ。青沢様

のお殿様という人も、たかが料理人の悪態など聞き流しにして下さりゃあいいものを、石見屋からお金を借りている手前、ほうっておけなくなったのだらうね。お役向へ手を廻して、事を大仰にしてきた。お前がこれ以上この店にいれば、お前だけじゃない、店の者たち残らずに迷惑がかかるのだよ。そこで、さっき言った話が、二つあるのさ」

おしゃべり、と言うのではないが、自分でも納得の行かないことは嫌いなので、お吉はいつも、こういう物の言い方をする。

膝に両手をつき、きちんとかしこまったまま傳八は、お吉の顔を見ていた。

「話が二つある、と言うのはね」

とお吉は、改った形になると、

「しばらくお前に、旅に出てもらいたい、ということ。もう一つは、酒をのむのもいいが、酔っ払うまでは飲まない、と約束をすること。その代り、お前が江戸へ帰るまで、あたしがお幸の母親代りになる。こ

こにいる板前さんも証人だ。加田さんの旦那も、そう言つて下すつた。いやかえ」

うなずいてから傳八は、膝を進めた。

「修業でございますから、旅へ出るのは、なんでもございませぬ。庖丁を三本、振分の中へ入れて旅へ踏み出せば、どこでも仕事は出来ませう」

「お幸のことと、お酒のことは、どうなのだえ。料理人が旅へ出て修業するのは当り前だが、お前の返辞次第で、あたしの考え方も決る」

そのそばから板前の茂五郎が、しみじみとした調子で言つた。

「もうじきお前が、脇板から、おれの代りに板前になつて、このお店の板場を仕切ってくれる、と楽しみにしていたが、ゆうべのことで、それもふいになつた。もっとも、お前が旅先で辛抱をして、酒も慎しみ、二年も経つてここへ歸つてくれさえすりゃあ、おれも安心だが」

「有難う存じます」

もうお吉と茂五郎の顔を見ていられず、傳八は畳に両手をつくつと、涙声になつた。

「これからは、酒も慎みます。二年ぐらい、あつという間に経つてしまいますから、お幸は待つていけると存じます」

それへお吉は、茂五郎と顔を見合せて、

「こつちは怒つてゐるのに、そう手放しでのろけられちゃあ叶わないね」

「それで、話は決つた」

と茂五郎は、懷中から手紙を取出して、

「大坂の新町の廓に、瓢箪屋という料理茶屋がある。

その主人は市兵衛と言つて、おれと一緒に、京都で四条流の料理の免状を貰つた人だ。お前のことは、この添状の中でよく頼んであるから、真直ぐ大坂へ行くがいい。瓢箪屋というのは、腕を磨くには恰好の店だぜ。江戸とも違つて、大坂の廓へ遊びに行くお客の中には、癖の多い食通がいるからな。みっちり修業をしてくるがいい」

お幸が、声を忍んで泣き出した。

その晩、八百吉の奥座敷で、上座に加田三七を据え、傳八とお幸の仮祝言の盃が交された。

出刃庖丁、刺身庖丁、薄刃、三本の新しい庖丁を、茂五郎が饒別に傳八へ呉れた。お吉からは、十兩の金包みが渡された。

「この店の料理人の傳八は、風をくらって逐電した、と明日の午過ぎ、役所へ届けておこう」

と加田三七は、傳八とお幸を見比べて、

「ここで一つ、傳八に念を押しておくが、お前、ゆうべ酔払って石見屋を殴ったとき、青沢甲介様のことを、こう言ったそうだな。お目付という役目を道具に使って、よくねえ金儲けをしている役人だ、とな」

「へえ」

傳八は困って、まだ腫れあがっている口のあたりを撫でながら、

「どうも、口から出まかせの悪態をついちまって、後悔をしております」

「ところが、大きな声じゃあ言えねえが、青沢様という人は、実はそういった風なお役人なのさ。近いうち、お役目で上方のほうへお出かけになるそうだから、大坂で顔を合わしたときは、用心をするがいいぜ」

傳八も、なんとなく背筋に冷たいものを感じた。苗字は青沢だが、赤ら顔の、いつも濁った眼をしている青沢甲介に、正面から睨みつけられたような気がしたからであった。

「お約束の通り、酒は決して酔うほどまではのみません」

坐り直して伝八は、四人の前で言った。

「たった二年の辛抱だからね」

と、お幸が、傳八へ守袋を渡しながら、

「お前さんは字を書けるのだから、便りをおくれ、おみさんに読んで頂くからね」

「おやおや、そんな役目まで引受けるのかえ。二年のあいだに、お幸も読み書きぐらい、人並になつていくっちゃあいけないよ」